

はじめに

基本的・標準的な古文の問題集は数多く市販されている。その種類は多種多様である。受験生諸君は、そうした問題集の中から、自分に適したものを選んで、解いて学習していることだと思ふ。

しかし、難関私大や国公立を狙う受験生たちの多くは、それだけでは十分に満足せず、さらに発展的な問題集を求めて、数多くの問題をこなしたいと考えて要求しているように思われる。市販されている問題集の中で、そうした要求を満たすものが少ないようで、探しあぐねている受験生の悩みをよく聞いている。そうした現状をふまえて、この問題集を、旧版の『入試精選問題集⑨ 古文』をベースに大改訂を加える形で作成することにした。

本問題集では、首都圏や関西圏の難関私大と中堅の国公立の入試問題を中心に編纂した。かなり難しい問題も選んであるが、あえて入試の現実を知るためにも設問などは改変することなくそのままの形で収録した。

であるから、くれぐれも、また基本的な力が身に付いていなかったり、標準的な問題集が十分にこなし切れていない前に手を出さないようにしてほしい。あくまでも標準的な力が身に付いた人が、さらなる向上を目指してがんばるためのものであることを、しっかりと理解した上で、取り組んでほしい。

目次

説話

① 古今著聞集・卷第一五・五〇四……14

② 撰集抄卷三の第四……18

③ 閑居友・下三……24

⑦ 松浦宮物語・三十一段……40

歌物語

⑧ 大和物語・一四一段……46

⑨ 平中物語・二十七……50

作り物語

④ 竹取物語・かぐや姫の昇天……28

⑤ 落窪物語・卷一冒頭……32

⑥ 堤中納言物語・「貝合はせ」……35

源氏物語

⑩ 源氏物語・「澹標」……55

⑪ 源氏物語・「橋姫」……59

日記

12 蜻蛉日記・中・天禄二年……………63

13 更級日記・東山なる所……………69

14 うたたね・三……………73

15 たまきはる……………77

軍記物語

18 平治物語・中 六波羅合戦の事……………90

19 延慶本平家物語・第六本……………94

評論・随筆

20 枕草子・九十段……………97

21 枕草子・二五〇段……………102

22 無名草子・紫式部……………105

歴史物語

16 大鏡・第二卷 左大臣師尹……………82

17 今鏡・第七 村上之源氏……………86

1 『古今著聞集』 卷第一五・五〇四

▼解答と配点▲

[解答]	
問一	a 3 b 7 c 5 d 1 e 4
	f 8 g 2 h 6
問二	A 2 B 3 D 1 E 3 F 2
問三	C 3 H 3 I 2 J 3
問四	すんでのところを殺されそうであったのを (19字)
問五	イ
問六	く
問七	3
[配点] (50点)	
問一	16点 (2点×8)
問二	10点 (2点×5)
問三	8点 (2点×4)
問四	4点
「すでに」の訳出……………2点	
「ぬべかりつる」の訳出……………2点	
問五	2点
問六	2点
問七	8点

▼出典解説▲

鎌倉中期の世俗説話集。編者は橋成季。

伝説・実話・巷談などを多くの書物から収集したものである。約七〇〇の説話を神祇・釈教・和歌・政道などの内容によって三〇編に分類していて、構成が整然としている。

▼本文解説▲

これは、『古今著聞集』の巻第一五の「鬪諍」の部に収められた話である。

静賢法印の許にいた馬允某は強力こつりきで勇猛なものであった。ある時、小冠者と双六を打っていたが、何が原因であったのか、馬允は口論のあげく、小冠者の下腹部を刀で突き刺してしまった。瀕死の重傷を負った小冠者は逆襲して馬允にしがみつき刀を奪い取って、強力こつりきの馬允を押し伏せて馬乗りになり刀を押し当て、今にも殺そうとした。ところが、小冠者は「自分は重傷で死ぬ。罪を作ってもつまらないことなので、功德としておまえの命を助けよう」と言って馬允を解放した。そして、静賢法印の前に行き、事情を話した後、そのまま死んだ。こうした小冠者のあり方を編者は「ゆゆしかりける剛の者」と評する。たしかに、瀕死の重傷を負いつつも、相手をねじ伏せたこと、さらには相手を慈悲で許し、重傷のまま助けを乞うこともなく、法印の前まで行きすべてを話した有様は、すばらしい「剛の者」である。逆に、馬允は、日ごろの「剛の者」という評判は何の甲斐もないことだったと編者は評するのであった。

馬允はさすがに自分の行為を後悔して、小冠者の父親の所に行き事情を話して謝罪し、存分の処置を求めるところが、父親は「息子には何か考えがあつて命を助けたのであろう。それに、おまえを殺しても、息子は生き返らない」と言つて、馬允をどうすることもなかつた。馬允はその場で誓を切つて出家し高野山へ行くと言つて父親の許を辞した。

編者は最後に、人を殺しておきながら、出家することで罪を精算したつもりになっている馬允の思慮の浅さや、僧になることぐらゐで相手の親の悲嘆や憤りが治まりはしないことに気づかないうかつさを「しかるべからず。ことにおきて不覚なりける男なり」と厳しく評する。

▼ 解釈 ▲

靜賢法印のところに、馬允なにかという、はなはだしく力が強く勇猛な男がいた。ある時、(馬允が) なんとということもない小冠者「元服して冠をつけた少年」と双六を打っていたところ、口げんかが始まつて、この小冠者を引つ張り寄せて、へその下のところを(刀で) 突き刺してしまつた。刀の柄のところまで(深く) 突き刺してしまつたので、生きてゐることもできないはずであつたのに、小冠者はまったく驚きあわててゐる様子もない。(小冠者はすぐに相手(の馬允) にしがみついて刀を奪い取つてあれほど強力の大男(である馬允) を押し伏せて、上に馬乗りになつて刀を突き立てて、

もう少しのところで殺してしまおうとしたが、どう思つたのであるうか、まず自分の腹を出して、傷を見て言うことには、「おまえはこれほどに(身動きできなくなつてしまつたので、おまえを私が) 殺すことに差し障りがあるはずがない。ただし、わたしのこの傷は重傷であつて、きつと死ぬにちがいない体だ。功德として、おまえの命を助けてやろう。最期に罪を作つてもつまらない」と言つて、何もせずに(馬允の体から) 降りてしまつた。そして、法印の前に行つて、「このようなことがありました」と言つて、事件の内容を始めから説明申しあげて、そのまま倒れ伏して死んでしまつた。(この小冠者は) すばらしかつた豪勇の者であることよ。

相手の男(である馬允) は、常日頃は強力の者として人に恐れられていたけれど、これほどの小冠者をけんか相手として突き殺したことでさえ思ひがけないことであるのに、(まして) 最後には(その小冠者に) 押さえつけられて、刀を奪い取られてすんでのところで殺されそうであつたが、(小冠者の) 慈悲のおかげで許されたということは、常日頃の強力の者だという評判に、いったい何の得があるものですか、いえ何の得もあるわけがありません。

あの男(馬允) が、この事件を後悔して、死んでしまつた小冠者の父親のところに行つて言つたことは、「私は、このよくな過ちをしてしまいました。すんでのところまで殺されそうであつたのを、(小冠者は) これこれとおっしゃつて(私の) 命を助けてくださったのです。悔やんでも悔やみきれませ